

## ベルリン市の観光街路における言語景観

—旧東ベルリン市インナーシティ地区の街路カスタニエンアレーを事例として—

池田真利子\*・高濱佑太郎\*\*

\*筑波大学芸術系, \*\*立教大学卒業生

本研究は旧東ベルリン市・インナーシティ地区プレントラウアーベルクおよびミッテ地区にまたがる街路カスタニエンアレーを舞台とし、そこに表出する言語景観 (Linguistic Landscape) を当該地域の歴史的背景および地域的特性とその変化と併せて考察した。その結果、当該街路の言語景観は観光地化とジェントリフィケーション双方の影響を受けていること、また前者は言語種の英語化や多言語化と関連付けられるのに対し、後者はドイツ語へと回帰する傾向にあることから、観光地化は言語景観のグローバル化を、またジェントリフィケーションの進行に伴いローカル化する傾向にあることが実証的に明らかとなった。また、再統一まで社会主義国家体制に属していた旧東ベルリン市の言語使用状況と比較しても、カスタニエンアレーの言語景観の変化は極めて顕著であり、言語は都市変容を理解するうえでの指標となるだけでなく、言語がヘリテージとしての一側面を有していることが分かった。

キーワード：ベルリン、言語景観、観光地化、ジェントリフィケーション、オンライン調査

### I はじめに

#### 1. 研究背景と研究目的

##### 1) 言語景観と都市変容

世界で初めて言語景観 (linguistic landscape) に言及した研究者は、管見の限り日本の地理学者の正井泰夫である。正井 (1969) によると、言語景観は「言語およびその視覚表現である文字からみた都市景観」と定義された。その背景には、都市化をベースに地理学内外において関心が高まっていた都市景観研究があったと理解される。

他方、1960年代以降の正井の研究は、より都市・文化地理学の景観研究へと移行した。とりわけ近年、日本の言語社会学や隣接諸分野を中心に多方面から言及される正井 (1969) は、銀座に次ぐ盛り場であった新宿の設営物に使用される言語種 (例えば日本語や英語など) と言語表記 (ひらがな、ローマ字など) の悉皆調査に基づく最初の研究である。また、正井 (1983) は、新宿における喫茶店の名称に関する詳細な調査データを分析

する。当該論文は、当時の新宿では、業種によって日本語に代わり外来語、あるいは外来語をрутとするカタカナや造語の増加がみられたこと、特に喫茶店の名称は1960年代初頭に欧州言語の使用が主体的であったのに対し、1980年代には英語が主体となっていること、また、地名や山岳指向、数の表記方法など、デザイン的視点にも言及する。正井の研究は半世紀程前に発表されたものであるが、以下4点において現在でも有用な視点を提示する。1点目は、「言語景観」の世界における先駆的研究であり、初期研究ながら言語種・言語表記を注視し、明確な研究手法を提示していること、2点目は、調査で得た生データを論文中で示すために、現在でも記録の価値を有すること、3点目は、高度経済成長期において変わりゆく東京の都市景観を、単なる視覚的側面として捉えるのではなく、社会的側面として捉えようとする点において地理学的視点の独自性が発揮されていること、そして4点目は、新宿における定点的観測を行った点であり、本稿の関心事である言語景観と都市変容の